

花に関する五十章

小原豊雲編

講談社



花に関する五十章

定価一、二〇〇円

昭和五十三年十月二十五日

第一刷発行

編者 小原 豊雲

発行者 野間 省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一一

振替東京八一三九三〇

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

▽落丁本・乱丁本はおとりかえします。

花と文学といけばな

——序にかえて——

小原豊雲

(小原流家元)

いけばなで扱う花材は、ふつう八百種ほどである。初心者が稽古に使う場合でも二百種ほどあるだろう。したがって、知らず知らずのうちに植物の名前や性質や特徴を覚え、身につけることができるのであるが、いけばなの真の美しさを表現するためには、単に植物の名前や分類学的な知識だけでは充分ではない。

むろん花をいけるからには、植物学的な知識がなくてはいけない。同じ科や同じ属には共通の特色があり、扱い方がある。はじめて出会う外国の植物でも、科が同じであれば、日本のものと同じ扱い方をしてほぼ間違いないものである。特に水揚げとか、折り曲げて^た繞めるなどのテクニクをとまなうから、植物の性質を知るには、植物学的な知識はどうしても必要になる。しかし、それで花がいけられるかといえは、そうではない。いけばなには、もう一つ大切な要件がある。

それは、取り上げた花にどんな由来があり、如何なる文学的背景があるか、ということである。もちろん、その花を、ゲーテがある詩に詠んでいるということを知らなくとも、花はいけられる。私がいわんとするところは、その花が、どのように見つめられ、どういうかたちで愛されたのか、その花を見る人の感情が大切なのだということである。

日本人であれば、菊、といったとき、ただ黄色い花というだけでなく、秋という季節、秋空、秋晴れという天象、気品格調といった花自体に持たせた価値づけ、さらには重陽ちやうようの節句、きせ綿の行事風俗、曲水の宴うたげ、養老の菊酒と、菊をめぐる連想がいくつか浮かんでくるはずである。菊の花を見る人にそれだけの連想があるならば、当然菊の花の美しさをいけばなで表現するためには、いける者もそうした背景を踏まえたうえで、いけ方を考えねばならない。風情のあるいけばな、観る者の心をうついけばなとは、その花にこめられた人々の感慨をとらえて、それを十全に表現しているものなのである。そしてその花の背景を象徴するのは、文学であった。

古典にあらわれた花は、やはりその時代の人々の花への好尚を端的に示し、かつ、以後の花に対する美的な精神性をかたちづくる役割をしている

る。そうした積み重ねが、いま我々が感じる花の美しさに大きく影響しているのである。また、現代の作家たちが作品のテーマにかかわるかたちで花をとらえたとき、それまで一般の人たちが感じていたものとまったく異なる花の美しさ、花の妖しさ^{あや}を提示してくれることがある。それもまた花に対する新しい見つけ方を教えてくれるのである。

風土や民族が違えば同じ植物であってもその感じ方、考え方が変わってくるのは当然であろう。私も世界各国で指導をしたりデモンストレーションを重ねてきているが、その国の国花や由来のある花に対する愛着は驚くほどである。その国の代表的な文学に詠まれている花を取り上げ、その美しさをいけてみたと言明を加えると、いけ手がびっくりするほどの反応がある。国民的作家に対する敬愛の大きさ、またそれを国民の財産だと考えている愛着の深さ、それが文化であり伝統なのだとしみじみ思わされる。

私自身も、こうした経験から、つねに花をいける者は、単にいける技術だけに偏することなく、広く絵画や文学をたずね、教養をたかめねばならないと説いているのである。

日本の文学では、特に自然とのかかわりが深く、自然と人との細やかな^{こま}交流があつて、美意識や美的情緒と分かちがたく結びついている。『源氏

物語』ひとつを取り上げてみても、植物がひじょうに多く表われてくる。すでに夕顔・葵・槿・若菜・紅梅・早蕨など一帖のタイトルの植物名であり、さらに紅葉賀とか花宴など花にまつわる行事が巻名となるものや、花散里・蓬生・松風・藤裏葉といった自然の美をテーマとするものなど、挙げていけばきりが無い。花の名がそのまま主人公の名であり、主人公の性格を象徴し、物語のテーマでもあるのである。そして情設定やストーリーまでもがその植物の名前に托されているのであるから、じつに卓越した美意識といわねばなるまい。

いけばなも、こうした日本人の自然に対する美意識が生んだものに他ならない。花をもつて単なる装飾とするのであれば、諸外国にもあるフラワー・デコレーションとなんら変わるところはないが、いけばなは花の美しさだけを見せるのではない。一輪の花に自然を象徴させ、一枝の風情に季節のうつろいを感じさせるといふ、花を通じて自然に対する感動を表現する術なのである。だからこそ、いける者に教養が要求されるのである。

小原流では、いけばなを学ぶ人々のために機関誌を発行しているが、編集部でも単にいけばな技術の紹介だけでなく、教養誌としていけばなの背景となるべき文学、美術、文化一般の紹介に力を入れている。その一環と

して『古典の中の花』という連載があり、もうだいぶ長い間続いているようであるが、作家、詩人、学者等多くの方々に、文学に描かれた花について執筆いただいている。

私も一人の読者として毎号愛読し、啓発させられるところが多く、また幸にして（小原）流人にも好評のようである。このたび講談社がこの企画に注目し、単行本として上梓じょうしされるという。我々いけばな関係者だけでなく、一般読書子にも興味のもたれるものであるのは心強い次第であり、花と植物と自然と、文学とのかかわりが周知されるのは、意義のあることだと思ふのである。

昭和五十三年九月二十一日

目次／花に関する五十章

花と文学といけばな——序にかえて……………	小原 豊雲	
1 葦の芽と桜と……………	安西 均（詩人）	11
2 万葉植物私考……………	山田 宗睦（評論家）	19
3 「おもろさうし」より……………	鳥越憲三郎（大阪教育大教授）	27
4 武蔵野のむらさき……………	秋谷 豊（詩人）	34
5 花にそむ心……………	伊藤 博之（成城大教授）	42
6 芭蕉俳諧の植物……………	楠本 憲吉（俳人）	48
7 与謝蕪村の花……………	大谷 篤蔵（大阪女子大教授）	55
8 近世文学と花……………	興津 要（早大教授）	63
9 漱石文学の花々……………	福田 清人（文芸評論家）	69
10 泉鏡花とあじさい……………	村松 定孝（上智大教授）	76
11 太宰治の美花……………	磯貝 英夫（広島大教授）	84

12	流れのほとりに	伊藤 信吉（評論家）	92
13	石川啄木と花	小田切秀雄（文芸評論家）	97
14	島崎藤村と花	瀬沼 茂樹（評論家）	107
15	朱鸞のうた	今西 祐行（劇作家）	114
16	白秋の花々	村野 四郎（詩人）	122
17	茂吉の歌道と花	分銅 惇作（文学者）	129
18	荷風「あじさゝめ」の時代	関根 弘（詩人）	136
19	八木重吉の詩の花	新川 和江（詩人）	143
20	三好達治の花	石原 八束（俳人）	151
21	大衆文学の花々	足立 卷一（作家）	159
22	童話「野薔薇」のおもいで	前川 康男（童話作家）	166
23	今年の牡丹は	上 笙一郎（児童文化研究家）	172
24	ツルゲーネフの薔薇	北垣 信行（東大教授）	180

25	「喜劇としての「桜の園」」……………	原 卓也（東京外語大教授）	187
26	ねがいをかなえる花……………	三木 卓（作家）	194
27	アンデルセン童話の花……………	大畑 末吉（故人・早大教授）	201
28	ヤコブセンと花……………	山室 静（日本女子大教授）	207
29	情熱の詩人バイロンと花……………	鈴木 保昭（専修大教授）	213
30	エリオットの花……………	中桐 雅夫（詩人）	222
31	嵐が丘と花……………	河野 一郎（東京外語大教授）	231
32	フランシス・ジャムの花……………	串田 孫一（随筆家）	237
33	カトランの十字架……………	田辺貞之助（埼玉医大教授）	244
34	フランス象徴詩の花……………	村上菊一郎（早大教授）	252
35	スタンダードとオレンジ……………	鎌田 博夫（東北大教授）	259
36	ランボーと花……………	栗津 則雄（法政大教授）	266
37	リラの小枝を折る詩人……………	木島 始（詩人）	273
38	「バーベナの匂い」……………	西川 正身（アメリカ文学者）	280

39	詩人としてのニーチェ	秋山 英夫（学習院大教授）	286
40	ヘルダーリンの花	神品 芳夫（東大助教授）	294
41	ヘッセと「アイリス」	西 義之（東大教授）	301
42	ギリシア神話の人と花	高津 春繁（故人・東大名誉教授）	308
43	ロルカの詩と花	小海 永二（横浜国大教授）	315
44	福音を彩る花	飯 清（牧師）	325
45	「浮生六記」より	堀 秀彦（評論家）	328
46	戒の香り	宮坂 宥勝（高野山大教授）	335
47	蓮の精哀歌	吉川 利治（大阪外語大助教授）	338
48	芳香花に秘める想い——タイ王朝文学	松山 納（東京外語大教授）	343
49	花愛ずる翁	駒田 信二（作家）	349
50	唐詩と牡丹	目加田 誠（早大教授）	357
	おわりに	由水 幸平	

1 葦の芽と桜と

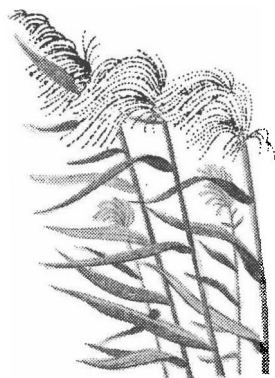
安^{あん} 西^{さい}
(詩人) 均^{ひとし}

▼日本神話の特殊性

日本神話のブームだといわれる。

ふつう日本神話という場合は、八世紀前葉の奈良時代の朝廷で編纂^{へんさん}された『古事記』と『日本書紀』とよぶ国史があり、いずれもその冒頭の神々の物語をさしている。したがって、これは記・紀神話ともよばれる。

記・紀神話の内容は、ひとくちでいうと、皇室の祖先の神々と、それをめぐる神々との物語である。日本神話が、他の民族の神話とくらべて国家主義的神話・政治的神話だといわれるのは、そのためである。



葦(アシ)

太平洋戦争の敗戦までは、国民全体が天皇を神聖視することが強請されたから、当然、皇室の祖先の神の物語である神話もまた、神聖視された。みだりに批判すべきものでないとされてきた。学問の対象とすることさえタブーであった。

——しょっぱなから、話が少々こむずかしくなりかけたが、これから日本神話のなかに「花」をさがしてみようとするに先だって、その程度の特異性は、とくに若い人たちのために書いておきたいと思う。

じつは、日本神話のなかに「花」の映像は乏しい。ひじょうに貧弱だといってもよい。

これがギリシア神話だったら、どうだろう。一例にすぎないが、ナルキッソスという美少年の話を知っているひとは少なくないに違いない。

——あるところによく澄んだ泉があった。狩りに出かけたこの美少年は、暑さにのどを渴かして泉のほとりにきた。身をかがめて水を飲むとし、水に映る自分の姿を、泉に住む美しい水の精だと思いこんでしまった。彼はその姿に魅せられ、抱きしめたいと腕を水にさし入れる。相手は逃げてしまう。……こうして自分を恋しているとも知らず、彼はむなしくやつれ果ててゆき、ついに死んだ。しかし死体はどこにも見つからず、一輪の白い花が残っていた。

ナルキッソス——フランス語でナルシスとよぶ、つまり水仙のことである。自己愛とか、自己陶醉という意味のナルシズムという言葉は、ここから生まれた。

まったく一例にすぎないが、このような文学的な興味ぶかさの点では、政治的であることを特徴とする日本神話のほうが、どうヒイキ目に見ても、劣っている。

しかし、それはそれなりに、私たちは「花」をさがしてみよう。具象的な「花」がなければ、せめて花を感じさせる「季節」に出会うことができるかも知れないのである。

▼天地初めてひらけしとき

どの民族の神話にも、たいてい天地創造とか天地初発とよばれる一節がある。旧約聖書のトッブにある「創世記」の冒頭、

始めに神が天地を創造された。地は混沌こんとんとしていた、暗黒やみが原始の海の表面にあり、神の霊風が大水の表面に吹きまくっていた。まず神が、「光あれよ」と言われると光が出来た。

(第一章第一—三節)

などはよく知られていよう。これに相当する部分を、わが『古事記』で読んでみると、

天地あめつち初めて発ひらけし時、高天たかまの原に成れる神の名は、天之御中主神あめのみなかぬしのかみ。次に高御産巢日神たかみむすひのかみ。次に神産巢日神かみむすひのかみ。此の三柱の神は、みな独神ひとりがみと成りまして、身を隠したまひき。

次に国稚く浮きし脂の如くして、くらげなすただよへる時、葦牙の如く萌え騰る物に因りて成れる神の名は、うましあしかびひこぢの神。次に天之常立神。此の二柱の神も亦、独神と成りまして、身を隠したまひき。(以下略)

『古事記』の冒頭はこのように、神の名前がずらりずらりと並んでいるだけの、はなはだ味気ない記述ではあるが、「陸土はまだ固まらず、水に浮いた脂肪のように、水母みたいにゆらゆらとただよっている」という部分が、ただ一カ所、詩のように美しい。そしてアシカビ＝葦の芽に、ウマシアシカビヒコヂという男神の名前をつけているのである。

この部分を、現代詩風に書き直してみようか。

陸はまだ 若い

水に浮く脂肪のように形がない

水に浮く水母のようにおぼつかない

けれど時がきて いまや春の光が吹き渡る

ごらん 所もさだまらなかつた陸のうえに

みどりの針のような

葦の芽が生えた